

顕現後第二主日

「主にあってむだでなく」

1ヨハ15:10-15

(1)

58節に自分たちの労苦がむだにならない、とあります。人間関係において次のようなことは無いでしょうか？

それは、みなさんの周りのどなたでも良いのですが友達でも家族でも、相手の事を自分なりに考えて、何かをして差し上げた場合のお相手の反応です。喜んでもらうと思って、何かをして差し上げたのですが、「何故そんなことをするのか」と問いたされたり、ひどい時は怒られたり、また喜んでくださったとしても、意外とそっけなくこちらが思ったような反応でなかったり、最悪の場合は、「それ、いちばんして欲しくない事です。やめてください」と言われたら、「あー、あんな事をやるんじゃないかった。」と、萎えたり、後悔したりします。しかし、反対に、こちらがやった事が相手の方のツボにはまる場合もあります。「あー、それ前から欲しかった。本当にありがとう。嬉しい」と喜ばれたりします。そんな経験はありませんか？この相手の方に喜んで頂けるツボがあるように、労苦がむだにならないツボにどうしたら辿り着けるでしょうか？ある程度は相手の方と普段から話をし、行動を共にすることで性格や興味等という人か知ることができます。それでも、喜んで頂くこととあれこれ考え苦心しますが、結局は、

どういう反応がかえってくるかは、何かをして差し上げてみないとわかりません。

さて、旧約聖書の伝道者の書は、エルサレムで誰よりも偉大な者になったと言われるソロモン王が書きましたが、2章11節に「私を手掛けたあらゆる事業とそのために私が骨を折った労苦を振り返ってみると、何と空しいことよ。風を追っかけるようなもの」と書いています。自分の功績を残そうが残すまいが、みな同じように時が来れば死に、いつしか人の記憶からも消え去るものだから、空しい。無意味とソロモンは言います。

私たちは、血肉の体を持っています。血肉の体とは、私たちのこの体の事です。年々ともんだんだん衰えていき、いつかは朽ち果てる体です。また、年齢に関係なく、生まれながらにまたは人生の途中で障害を背負う場合も有ります。所詮人生なんてどうせ死ぬのだから好きなことをして生きればいい、と生きる人もいるかもしれません。でも、聖書には、人は一度死ぬことと死後に神の裁きを受ける事が定まっているとあります。死んで終わりではないのですから、心して生きねばなりません。しかし、ひとたび主の福音に触れ、キリストが私の罪の為に身代わりに死んでくださったと信じ悔い改める時、私たちは罪のない聖い者とされ、私たちの内に聖霊なる神様が来て下さるのです。福音に触れた者には大きな変化が訪れます。目が見えない者でも今

までとは違う生きる道を見出します。耳が聞こえない者であっても聖書から神のことはを聞くことが出来まます。足が不自由であっても、神の愛の肉を歩むことが出来ます。さらに、それら血肉の体はこの世に限定された一時的なものだ、と聖書は教えています。血肉の体はいつかは死にますが、キリストが再び戻って来られる時には、新しい体を与えられます。その体は、障害もなく、病気にもならず、決して死ぬこともありません。

5-1節には奥義を告げるとあります。この奥義とは、今まで秘密にされて来たものです。が、神の定めの中に、啓示により解き明かされるものです。その奥義によると、世の終わりに、私たち人間は血肉の体という朽ちる体のままでは、神の国に入る事は出来ませんから、5-2節にあるように、神の計画があり、私たち福音を信じる者は神の国に見合う朽ちない体にたちまち変えられるのです。死者は朽ちない者によみがえるのです。ラッパの響きが、新しい天と地の到来を告げます。民数記10章10節にあるように、ラッパは大いなる祭りやその他特別な行事の始まりの合図で吹かれるもので、ユダヤ人なら誰でもそれがいかに重要なことであるか理解できました。

(2)

1-5章の1節に注目します。コリントの信徒たちにパウロが宣へ伝えた福音は、コリントの信徒たちが受け入れ、それによって立つてくる福音です。また、コリントの信徒たち

がよく考えもしないで信じたのでないなら、パウロが宣へ伝えた福音のことはをしっかりと保ってれば、この福音によって救われるのです。堅く立って動かされることのない信徒とされます。わたしたちもコリントの信徒たちと変わりありません。堅く立って動かされることなく、主のわざに励むためには、福音のことはしっかりと保つことです。キリストは聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケバ(ペテロ)に現われ、それから1-2弟子に現われたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。七節、その後、キリストは兄弟のヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。そして、神の教会を迫害したパウロにも現れました。このように、多くの人々が復活のキリストに出会いました。ユダヤ人を恐れて家の戸を閉め切っていた弟子たちも聖霊なる神様により力強く福音を宣へ伝える者に変えられました。その福音は、私たちの元に届けられました。パウロも神の恵みにより、福音を宣へ伝える者にされました。5-5節です。これは、ホセア書の13章14節の預言です。

「わたしは、よみから彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ。おまえの舌は、どこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。」「この」彼らを解き放ち」と彼

らを死から贖おう」という動詞はどちらも身代金を払って助けるの意味があります。罪のとげの「とげ」は英語の聖書ではPLAGUE（ブレイク）という単語で疫病とか厄介な物という意味です。針はD E S T R U C T I O N（ディストラクション）という単語で破滅の原因という意味です。私たちが知らないうちに感染している疫病のようなまた破滅の原因である罪から天の父なる神が解放して下さる、贖って下さるという預言です。キリストによってこの預言は成就しました。

6章20節にあるように、あなたがたは、代価を払って買い取られ聖霊の宮とされました。ですから、自分の体をもって、神の栄光を現わせるのです。堅く立って動かされることなく、主のわざに励めるのです。聖霊なる神様が導いて下さいます。

58節に戻ります。よく読んでみますと、複数形で書かれています。「あなたは、あなた自身の労苦が主にあつて無駄でない」とは書かれていません。「あなたがたは、自分たちの労苦が、主にあつて無駄でない事を知っている」と書いてあります。私は、自分が天国に行くことだけの為に、救われた訳ではありません。実はイエス様を信じ救われるとは、1章9節にあるように、真実の神に召されて、神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられる、という事です。交わりとは心と心の人格的交わりを指します。主イエス・キリストとの交わりの中は教会です。

教会の交わりを通して、私たちは信仰を強くされ、主に用いられる者にされます。教会の交わりは、若いも若きも男性も女性も、また色々な分野の職業人でもある方々との信仰による交わりです。教会はキリストの体であり一人一人はその器官とありますから、それぞれの器官が自分の働きをする時に主の栄光が現わされるのです。主はブドウの木、あなたがたは枝です。枝がブドウの木につながっていれば、豊かな実を結ぶのです。

(3)

2020年9月、私の父が100歳と11か月で天国に帰りました。第一次世界大戦が終わった1919年に生まれ、20代のほとんどは中国大陸での戦争に明け暮れ、後半の3年間は極寒のロシアで捕虜生活を体験しました。私が物心ついたときに、日本に戦争から帰ったあとの苦労話を聞かされました。70歳からは、主を信じ洗礼を受けました。それから、30年100歳になるまで礼拝出来たのは主のおかげです。祈禱会で、祈りの課題を書くために、用紙が回ってくる、必ず教会の発展と書き留めています。浄土真宗を信じ、毎朝仏壇に祈っていた父がイエス様を信じて変わりました。聖書を読む者と変えられました。100歳になっても、病気で通院はしていましたが、教会も祝福されて多くの兄弟姉妹との交わりも与えられました。父にとっては、みんなの為に主に祈る事が主にある働きでした。

創世記3章でアダムとエバが食べてはならないと神様が命じた木から木の実を食べたり、イエス様が十字架にかけられたりで、サタンが勝利したかのように錯覚する出来事がありました。しかし、神はイエス・キリストを死者の中から甦えらせ、サタンの見せかけの勝利を敗北に変えられました。キリストは死に勝利し、同様にキリストを信じる私たちも死に勝利するのです。もはや、律法は私たちが律法に従うことが出来ないからと言って私たちを罪に定める事は出来ません。イエス・キリストが律法に従えない私たちの罪の身代わりを罰を受けてくださったからです。堅く立って動かされることなく主のわざに励みましよう。私たちは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。

【共にいのちを】